

MADE ~ JFF #503 ~ JFF # . . .

「MADE」での「Tom Ritchey」

▶「Tom Ritchey = トム リッチー」については本誌でも幾度も登場している現代自転車界の現役の歴史的な人物ですが、8月24日に米国の北西部オレゴン州のポートランドで開催された MADE (=メイド:フレームビルダーを中心出展者としたトレードイベント) に登場し、大変貴重な溶接場面を限られた空間で披露されました。

▶彼の妻は独自の論理 (LOGIC) で製品開発設計製造を貫き通していることではないかと思えます。彼は溶接に真鍮溶接棒 (ロッド) のみを使用しロウ付けをします。このロッドはアメリカ製の希少な材料で、まず本体を治具で固定しロッドで部分タッグ (決めロウ付け) はするものの、あとは治具を使わず本体を手で回しながら溶接を進めていきます。しかも素手です。

▶一番大切なのは、最小限の行為で確実な接合を美しさを交えて可能にすること。材料選択は勿論のことですが、作業の独自性は他に類を見ないものです。低温のガスにより最小限のロッドで確実にロウを行き渡らせ、本体に対して熱による影響を最小限に抑える。よってその都度本体の角度を変えながら「Gravity= 重力」を活かしてロウを巡らせる。つまり本体を自由に回転させる必要がある、とともに温度状況を把握しなければならない。治具を使わず素手でやることの意味がわかります。最小限のロウで済ませることで最終的な磨きも最小限で済む . . . ということ。

※治具を使用すると上からは重力を掛けられるが横からは掛けられないので、シートチューブのみを掴んで回転させる方法を直々伝授されたビルダーは採用していたことがある。

▶今回溶接場面のパフォーマンスをされた古典的名品である「Ritchey Bullmoose bar」は「bi-plane Forks」とともに彼が自ら古典的フレーム所有者の為だけに製造するものですが、独自の論理に基づく手法は日本の「日東」さんでも脈々と伝承されており、時間に追われるだけのもの作りではない継続性は物作りの真髄であると改めて感じられた Tom Ritchey の作業場面でした。



▲フィレットされた「Ritchey Bullmoose bar」



▲使用する真鍮溶接棒は使用済みの端々を繋ぎ合わせて再生したまさに SDG's なものでした。彼は単に自然にそうしているだけだと思います。



▲ロッドを溶かし流し込んでいきます。ハンドルは使い古したガタガタのテーブルと膝の上に置いています。



▲素手でハンドルの先端を持ち熱してロウを重力を利用して巡らせていきます。既にこの時点である程度のフィレットになるようなラインを重力を操って描いているのです。



▲年季の入ったテーブルやガラスや継ぎで持った真鍮溶接棒。



▲今回の会場に置かれたハンドメイド製品



▲トム リッチーがパフォーマンスのあとにプレゼントしてくれた使いかけの溶接棒。ほんとに継いでいます。

【JFF #503 のプロトタイプ】

OnebyESU のフレームは Tom Ritchey 自ら伝承した TOYO 製作フレームを遺伝子に持つシリーズで、リムブレーキロードモデルは 2014 年のファーストモデル以来 10 年ぶりとなります。まだプロトタイプであり、詳細は変更されていきますが、まずはこの場で少し紹介させていただきます。オーソドックスでありシンプルであり、OnebyESUらしいジオメトリーであるこのフレーム。エンドは Ritchey 製で生産工場は Ritchey フレームの生産工場でもあります。



▲シートステーは単なるベンドスタイルではなく、エンド先端のみベンドで設計しています。



▲フルカーボンフロントフォークと共に直線と曲線からなりトリプル&ダブルパテッドを駆使したクロモリです。



▲何も引かない何も足さない、ライダー自身が不安なく四六時中爽快な風を感じることが目指すところです。

JFF # ○○○ . . . 電子制御と油制動、空気抵抗と鉄仮面、実はズバツと自由でいたい私たちの旅路。目標と抑制の渦に巻き込まれまいと争う自転車乗りの皆様。複雑な旅路だったとしてもワクワクドキドキしつつ自分を取り戻す極シンプルで安全な道具としての自転車があるべき姿をご提供したいと取り組んでいます。